

ハイチの窮状報告

AMDA渡久地医師

ハイチ地震被災者緊急医療支援活動として、国際医療援助団体AMDA沖縄支部から派遣されていた渡久地宏文医師(63)は沖縄セントラル病院がこのほど帰沖し、5日夕、那覇市の同病院で報告会を開いた。渡久地医師は「最貧国のハイチは医療環境も悪く、継続した支援が必要」と現地の窮状を報告した。

(3面参照)



ハイチ緊急医療支援活動について話す渡久地医師＝5日夕、那覇市・沖縄セントラル病院

「支援継続を」

ハイチ大地震の医療支援で渡久地医師は1月14日に沖縄をたった。米国の医療チームと共に医療活動にあたり、同29日に帰国した。

震源地に近い首都ポルトープランスでは大統領官邸をはじめほとんどの建物が倒壊し、多くの住民が建物の下敷きになって死亡した。渡久地医師は「山のように積まれた死体は、伝染病を防ぐため身元も分からないまま焼却処分されていた」と惨状を振り返った。

整った医療設備がない中、骨折や外傷、感染症などを治療。「被災直後は外傷が最も多かったが、PT

SD(心的外傷後ストレス障害)などはこれから広がるのでは」と懸念した。空港には諸外国からの食料や医療品など救援物資が多く届いていたが、政府機

能がマヒして住民の手元に届かず、市街地では暴動も度々発生したという。渡久地医師は「日本のメディアもこの窮状をもっと伝えるべきだ」と語った。